

はじめに

全国 LD 親の会は、1990 年 2 月 11 日、9 団体が発起団体となり「全国学習障害児・者親の会連絡会」として設立されました。2020 年には、設立 30 年を迎えます。設立初期の会員の子どもは、40 才代となり、親は子どものライフステージを通じて、LD 等発達障害の特性と向き合ってきたこととなります。

LD(限局性学習症)を団体名に入れている全国 LD 親の会ですが、実は会員の子どもの診断名は ASD(自閉スペクトラム症)が一番多くなっています。最近では診断時期が早くなる傾向がありますが、以前は、小学校 2・3 年生になり、学習面の困難をどうにかして欲しいといった思いで、入会する親がたくさんいました。

「学校での友達とのトラブルが多い」「授業中じっとしてられない」「こだわりが強い」「縄跳びができない」という ADHD(注意欠如・多動症)や ASD、DCD(発達性協調運動障害)の特性がみられる子ども達ですが、学習面での「教科書の音読が苦手」「板書をノートに写せない」「書字に時間がかかる」といった読み書き困難も併せ持っている子どもは少なくありません。ASD、ADHD、PDD(広汎性発達障害)あるいは DCD と DD(発達性読み書き障害)の併存率は高いと言われてはいますが、私たち親はそれを体験的に知っています。

また、読み書き障害がある子どもたちの困難さは、読字・書字が苦手であるということ以上に、その障害が理解されないことにあり、理不尽に叱責されたりして「自信が持てない」「自尊感情が低い」「他者依存傾向が強い」といった人格の形成にも影響を与えるといいます。

読み書きが苦手な子どもたちは成長し、おとなになり、読み書きが必要とされない仕事を選んで就職していきます。社会に出ると、「読み書き」よりは、社会性のほうが課題になることも多く、親は子どもが学校に通っていたときには散々苦勞してきた「読み書き困難」については、差し迫った課題として挙げることも少なくなります。しかし、おとなになって読み書きができるようになったわけではないし、また、読み書きが苦手でも困らない社会になったわけでもありません。読み書き困難が顕在化されにくくなったに過ぎないのです。

今回、厚生労働省の障害者総合福祉推進事業で、「発達障害者の顕在化されにくい読み書き困難についての実態調査」をするにあたり、本来は、学齢期に読み書き障害と気づかないまま、おとなになっている人たちを対象に調査すべきなのだろうと思いました。しかし、そんな調査は難しく、会員を主体としたアンケート調査となり、更には、読み書きが苦手な人に文字によるアンケート調査をするという矛盾を感じる調査方法になりました。ヒアリング調査では、親の会以外の方、おとなになって読み書き障害だと分かった方にも協力をお願いしましたが、読み書きが苦手な人対象の調査手法の研究も必要ではないかと感じました。

6 か月という短い期間でまとめた調査で不十分なところも多々ありますが、改めて明らかになったことも少なくありません。発達障害のある人への支援体制整備が進められてきたこの十数年ですが、発達障害のある人の読み書き困難という切り口から、成人期の支援の在り方の検討資料として各方面で活用されることを願っています。

2019 年 3 月

特定非営利活動法人全国LD親の会
理事長 井上 育世